編集後記

「こども学研究」第２号を発刊いたしました。掲載する内容は、《原著論文》４本、《研究ノート》２本、計６本です。昨年度創刊号が９本であったことを考えると、少々寂しい思いがします。

学科の研究紀要の意義について、太田光洋こども学科長は、創刊号（2019 年３月刊）の巻頭言で次のように記しています。

> ・・・子どもや保育について、どのような課題があり、どのように考え、どのように実践していけば良いのか、そして保育者養成はどうあればよいのか、哲学、歴史、心理学、医学、小児神経科学、社会学、経済学、制度や政策などより広い学問、研究領域の協働によって、その知を結集し、子どもを大切にする社会のあり方、子どもを育てる知と実践を追究することが強く要請されている。

また、私も同じ創刊号の編集後記で、次のように記しています。

> 個々の研究経過及び成果を披露することにとどまらず、豊かな誌上討論や研究交流へと発展していくことになれば、本誌刊行の主要な目的の一つを達成することになるでしょう。

言うまでもなく、学科の教員は各専門領域の学会等に所属して活発な研究活動を展開しているでしょうし、研究成果を公表する機会は学外にも多くあるでしょう。しかし、上記の引用のように、学科の研究紀要は各教員の研究成果の公表だけにとどまらない重要な意義を持っています。「こども学研究」誌上における討論や交流は、学科の教育理念や教育課程及び教育内容・方法に関する認識の同異を確認することに繋がるものと考えています。そしてそれは、「協働」や「知の結集」の契機となるものであり、「協働」や「知の結集」の成果は、学科の教育課程や教育内容・方法の改善や改革となって現れるでしょう。

こども学科には、多領域に亙る専任教員が配置されていますが、各教員が実践する授業において、「こども」をどのように捉えるか、保育・教育実習とその他の授業をどのように繋ぐか、あるいはアクティブな学びをどう位置づけるか、フィンランドの保育・教育を我が国のそれとどのような観点で比較するか等々、多様で多角的な討論や交流が展開されることを切望しています。

このような意味から、「こども学研究」への積極的な投稿を一層求めたいと思います。

「こども学研究」は本号から表紙デザイン等装丁が新しくなりました。デザインは宮城正作講師が考案しました。今後この装丁が、掲載される論文等との相乗効果で、味わいを増していくことでしょう。

（木山　徹哉）